

の型式より發展變化し來れるものなること、他の生物界の諸現象と同じく、進化論の原則に支配せらるゝものなるを知る可し。型式學の方法も畢竟此の進化の大原則の應用の一端のみ。(此章未完)

歐洲西部戰場の地理觀

理學博士 小川 琢 治

五年に亘つた世界戦争は彌獨逸の降伏に等しき利である。

休戰條約によつて終結した。其の突發の初に當つて我々の交戰國の國土人口資力によつて打算した我が聯合國側の勝利を得べき權衡は屢獨塊兩國の惡辣なる手段によつて顛覆されんとしたが、終に陸上及び海上に於て揮うた暴力が自からを禍して戰敗者として屈服するの已むなき窮境に陥つた。是は獨逸國民としては支那人の所謂天道還るを好むといひ、己に出たるものは己に還るといふ悲惨な判決に服従したもので、暴力に對する正義の勝馬尼の參加と潰敗、塞耳維の全土喪失等續出して

之を戰場に就いて觀れば、戰局の初期に於て白佛兩國に跨る西部戰線と、東普漏士波蘭及びガリシア戰線及び塞耳維西戰線の東部兩戰線から成り伊太利の宣戰によつて北伊太利の南部戰線が附加られ、更に勃俄利亞、土耳其、希臘、モンテネグロー四國の加入によつてバルカン半島は亂麻の如く入り亂れて戰つた。然るに英國のガリポリ半島及びバグダット遠征隊の敗戰、露國の敗績、羅馬尼の參加と潰敗、塞耳維の全土喪失等續出して

東部及び東南部の戰線は盡くヒンデンブルグ、マツケンゼン等の諸軍に蹂躪席卷されたり、第二、三期に於ける戰績は全く中央同盟國の意の儘となつた状態で、終に露國の革命に次ぐ瓦解によつて東部東南部を通じて聯合國の戰鬪力は殆ど全く全滅した。

此の間に西部及び南部の戰線は白佛英伊四國の惡戰苦闘によつて殆んど全く釘着にされた塹濠を維持し、特に西部に在つては初年秋季獨逸軍の侵入以來戰線の移動甚だ小く、獨逸軍のダンケルクアミアンを目標とせる進撃は悉く撃退され、特にプエルダンの固守と昨年の進撃によつて同盟軍に一泡を吹かせたが、東部の潰敗の影響は西部戰線に影響して、北伊太利にては獨逸軍の東北伊太利に於ける大進出となり、今春の巴里、アミアンを目標とせる大進出となり、第四期に於ても聯合軍は尙ほ不利の状態を脱せなんだ。

然るに戰線に於ける一勝一敗よりも遙かに大なる效果は合衆國の參加によつて徐々に西部戰爭に現はれ、今秋に至つて獨逸軍の出鼻を挫くフオツシュ元帥の作戰見事に成功して、第二マルヌ戰の敗績を最期として獨逸軍は敗退又た敗退、終に佛國々境に壓迫され、白國の一半を撤退し、終に兜を脱ぎ軍門に降るの醜態によつて數千萬人の血を流した悲劇は飽氣なく幕を下した。勿論獨逸降伏の前には士勃の屈伏と、埃國の潰亂があつて、獨逸が戰爭を繼續せば東南兩面からも聯合軍の侵入を被るべき險惡な状態に陥つたので、其の萬事休したとの斷念を早めたのであらうが、西部に先づ起つた戰爭は同じく西部に於て最後の鐵槌を被つたのは事實である。

此の大戰爭に於ける決戦は何處で戦はれたか。矢張り初年の秋九月に巴里を目標として佛國に侵入し、一氣にプエルダン、巴里間の佛軍戰線を突

破せんとして、マルヌ河畔で巴里要塞からの側面攻撃に遇ひ、クルック軍が其勝に乗じた追撃の姿勢から一轉して遙かに東北に押し返されたのが最大の蹉跌で、是より以後西部の獨逸軍は如何に奮闘しても終に決定的捷利を獲る能はず、特に先づ佛國を屠り戈を反して露國に當り、東西兩戰線に於て半年の間に意の如く全勝を占めんとした所の豫定計畫を全く畫餅に歸せしめたのである。實にアチラが四五一年アエチウス、メロブエ、テオドリックの聯合軍にシャーロンの野に敗られた以來の決戦が、同じ河の下流で戦はれたのである。第二のハンスと呼ばれた白狼群が此處で再び其咆哮の氣勢を殺がれたのは、所謂歴史の繰返された奇蹟と謂はねばならぬ。

此の第一マルヌ戰以來一進一退した西部戰場に於ける彼我形勢の一九一八年に於ける轉倒は實に急轉直下で、積水を千俣の谿に決し、圓石を千俣

の山に轉するが如き勢である。此歳三月に於ける戦局は同盟國が東部戰場から生じた餘力を以て補充した豫備隊を提げて、前年西部に失へる陣地に對して加へた猛烈な襲撃を見るに、五年來の戰爭の結末を一舉に決せんとしたもので、終に長距離砲によつて巴里を威嚇し、七月に至り再び其西南の突角よりマルヌ河畔に殺到し、巴里アミアンを奪取せざれば止まぬ勢を示し、五ヶ年間に於ける第二の大危機であつた。之に對してフォッシュ元帥の手に統一された聯合軍の行動は、其攻撃の機先を制し、一撃の下に其銳鋒を挫き、更に進撃に次ぐに進撃を以てし、充實せる聯合軍を提げて息を繼がせぬ攻撃振を示し、實に五年間の溜飲を一度に下げた快事である。然るに我が同胞中にも第一マルヌ戰の意義を解せぬか又は解せぬが如く裝ひつゝ、軍事専門家として歐洲戰を談じ、或は自ら許す獨逸通にして休戰條約成立の發表ある頃に尙

ほ此の戦局の變化を以て、「單に獨逸軍が豫定の退却をなした後に聯合軍が入つたのであるから、聯合軍が勝つたのでもなんでもない」と公言する如き人士があるのは咄々怪事といはねばならぬ。

西部戰場に於ける戦蹟を追跡し來つて感ずるのは、東北佛蘭西の戰場としての地貌が今回の戦争に對して重大なる影響を持つたのである。佛國の北部を占め其頭腦を成した所の巴里盆地は東南邊に亞爾伯と中央高原との二重の障壁を有し、其東にブラーヂュ山地あり、更に東北にアルダンヌ山地あつて、盆地其ものは珠羅層、白堊層及び第三紀層が巴里を中心として共心圓を描き包擁し、各層共に此中心に向ひ緩漫に傾斜し、ものである。故にセイヌ河と其支流とは巴里近傍に於て放射狀の溪谷を成して居るが、其上流は何れも異つた地層間の共心圓の弧を成した溪谷を一旦西北に流れ折れて西南乃至西に流れることになつて居る。其

の最も著しきはエーヌとマルヌで更に其の外にムーズモーゼル兩水が西北及び北に流れて居る。而してエーヌ河の本流たるオアズ河は西南に流れ、ムーズの下流及び其支流のサムブル河と共に一直線を成してモーブーヂュ、ナムールを経てリエージュに達し、獨逸のライン下流地方との間に最も都合の好き交通線となつて居る。佛國の對獨國防上に力を盡したのは、其のブオーヂュ、アルダンヌ間のロールレーヌ地方で、今回開戦の初にも主力を東北に用ゐたのであるが、獨逸が永世中立國たる白耳義國のリエヂュを破り、其陣立の最左翼から北佛國境に亂入し、オアズに沿ひアマアンまで侵入したのは如何とも爲し能はなんだ。然るに獨逸軍の佛國侵入後戦線が巴里の東に於て東西に走るに至つて弓狀を成し、今述べた西流する諸河は重大な戦略地理上の意義は著明となり、特にレンスの西方に在る漸新層の産地の間を截つて流れるマル

ス、ブエール、エーヌの諸水の溪谷は防禦線として重要で、獨逸軍の突破によつてマルヌ河左岸に足溜りを得るとはブエルダン、巴里間の佛軍戦線に對して最も危険である。又た西部戦線が久しく其北に於てレンス、ソアソン、ペロンヌ、アルラス間の弓状の線を成し、一進一退したのは聯合軍の最も努力を要した所で、最後に本年獨逸軍が猛烈な攻勢によつて此の部分を破つてアミアン、巴里間の交通線を脅かしたのは、英軍の脆き敗戦にもよつたが、之を地勢上よりいふも、レンス西方のタルドノア高地及び東西に走る小溪谷を北より南に越えて佛軍を攻めるは難く、ソナム其他の東西に走る溪谷に沿ひ西に向ひ英軍を攻めるは易かつたのが著しく戦局に影響したものと想はれる。最後の聯合軍の逆撃に當つて同じく此等の東西に走る溪谷に沿ひ最も容易に進歩したことからも、此の想定の蓋然なるは明かである。

故に西部戦線に於て獨逸軍が二回までマルヌ河の渡河に於て失敗したのは、何時も西方から東西乃至東北西南に流るゝマルヌ其他の諸水に沿ひ其側面を脅かす運動に成功したもので、佛軍がレンス高地の突角を維持して、其西に於ける獨逸軍の南進運動に對して重大なる威嚇となつて居たのが此の方面に於ける五ヶ年間の戦闘に對して非常に深い意義を有して居る。第一マルヌ戦後にデヨツフル元帥の巧妙な作戦により、レンス近傍から獨逸軍を撃攘したのは、第二マルヌ戦に對して天王山占領の如き意義を有して居る。獨佛兩軍の戦闘振りには元龜天正年間の甲越兩軍の如く、虚實相當り、何れの場合にも進退宜しきを失はず、最初の獨逸軍の疾風の如き襲撃に對してブエルダンを樞軸として西北東南に走る戦線から、左翼の退却により大回轉運動をなして、東西に近きブエルダン巴里間の東西に走る戦線となるまでに、初期に於

て悲惨なる敗退を餘儀なくされた時には、佛軍の被つた打撃は頗る大であつたが、而かも其の戦闘主力を保持して長途の行軍に疲れた敵の右翼に、巴里要塞の守備に當れる新銳の部隊を以て見事なる逆撃を試み、其側面を猛打して一氣に攻勢に轉じた手際は、佛國民の血を湧かせて、何處までも戦線を固守して頽勢を挽回せんとする勇氣を鼓舞し得た。爾來獨逸軍は此の東西戦線に於て幾度も部分的攻撃を試みて何時も失敗に了り、巴里シャーロン間の交通幹線は確保され、プエルダン、メツ線及びピツール、ナンシー、ストラスブルグ線は常に佛軍の手に在つた。皇太子軍が全力を盡してプエルダン奪取戦を試みたのは、侵入軍として先づ其第一線の要點を略してムーズ河に沿ひ其第二線を脅さんとした正當な計畫である。東方から巴里に達せんとするにはプエルダンは第一の攻撃目標たらざるを得ぬ。然るに是亦た失敗に了り、

獨逸軍の左翼よりは、戦線の突破は全く出來なんだ。其の最後の手段としてオアズ、ソナム溪谷に沿ひアミアン巴里間に進出し、英佛兩軍を中斷して英軍を粉齶せんと試みたのは、天險に據る佛國精兵を避け、未熟なる英軍の戦線に鋒を向け、成功せば佛國北部を席卷し、ドーブラー海峡を占領し、英本國をも威嚇し得べしとしたもので、是れ亦た西部戦線に於ける侵入軍の作戦として正當な計畫であつて、本年の最後の大攻勢は此の意味に於て幾分の成績を擧げた譯である。故に此時獨逸軍がアミアンに到達し得たならば、聯合軍には非常な打撃となつたが、一時崩れんとした英軍は、佛軍の協力により戦線突破の侵入軍の計畫を挫き得て此の危機を脱した。

一九一四年以來獨逸軍は其精兵を西部戰場に廻し、幾度も集團攻撃によつて堅固な塹壕を奪取せんと試み、部分的勝利を得る爲めに多大の犠牲を

拂つたのは、長篠の柵外にて織田軍の鐵砲に撃れた甲州軍の如く、次第に攻勢の鋒を鈍らし、特に狂暴なブエルダン奪取戦に於てブロックの守勢を利とする卓上論をして名を成さしめた。デョッ。フル元帥の執つた壁を堅くして秦兵に當つた廉頗長平の作戦を學んだ計畫は、時日の遷延と共に倍有効となり、終に聯合軍に米國が参加するに及び、平時に於て獨逸兩國に對し三四倍する工業の製造能力を以て、全力を盡して兵器其他の軍資を集め

國 栖 の 名 義

無數の大砲、タンク、自動車、飛行機を以て其疲憊せる陣地を攻撃することとなり、終に獨逸父子をして長篠戰敗に彷彿たる潰敗をなさしめた。我々は慘澹たる戰雲に鎖された世界が横暴なる軍國主義の潰滅により再び平和の天地となつた新年を迎ふるに當り、其の經過を追跡して今日あるを得せしめたるマルヌ戰捷の意義を高調して、聯合國の幸運を祝せんとするものである。

(大正七年十一月十九日稿)

文學博士 喜 田 貞 吉

大和吉野の山中に國栖といふ一種の異俗の人民が居た。所謂山人やまびとの一種で、里人さとびととは大分様子の違つたものであつたらしい。應神天皇の十九年に吉野離宮に行幸のあつた時、彼等來朝して醴酒を

献じた。日本紀には正に『來朝』といふ文字を使つて居る。彼等は人となり淳朴で、常に山菓こみかを取つて喰ふ。また蝦蟇かまを煮て上味とする。其の土は京(應神天皇の都は高市郡の南部大縣の地)よりは東南、山を隔て、吉野河